

新
唐
詩
選吉川幸次郎 著
三好達治 著昭和廿七年八月 岩波書店
新書版 二二三頁 一〇〇四

最近「民族文化」や「民族の文化遺産」について廣く論ぜられて
いる。それは我々が直面している日本民族の危機という切實な現實
の中から生れてきた課題である。

ところで「東洋のすぐれた財寶であり、世界の詩のなかでも最も
すぐれたものゝ一つ」といわれ、またわが國の平安朝以來、熱心に
學ばれ、國文學上にもはかり知れぬ貢獻をしてきた唐代の詩は、た
ゞに中國民族のすばらしい文化遺産であるばかりでなく、われわれ
日本民族の文化遺産といつてもいゝすぎではなからう。このような
唐代の詩のうち、殊にすぐれた盛唐期の詩人を中心とする「新唐詩
選」が吉川幸次郎、三好達治の兩氏によつて出されたことは喜ぶべ
きことである。

本書は前後二篇から成り、前篇は吉川氏が専門の立場から「主と
してその訓詁を」後篇は三好氏が「その味い方」を詩人の立場から
説かれている。兩氏が唐詩を新しく選ばれたのはこれを「わが國の
若い世代の人たちに近づける」ためである。従つて本書は從來の解
説書にみられるような無味乾燥なものではなく、平易に興味ふかく
作品を説明されている。たしかに「ドストエフスキー、バルザック
の譯本を徹宵読み上げるのに拂うほどの努力」を漢詩に拂わない、
そして「何か近づき難い疎遠なものゝように考える」人々にさえ、
必ずやさやかな親近感を與えるような書物である。

このような良き唐詩入門書としての本書について、素人の私には
詩の選擇とか説明の内容等には立入つて何もいえないので、歴史を
學ぶ者の一人として感想を記したい。

先ず兩氏は何故この時代に唐詩を若い世代に近づける必要性を感
じられたのであろうか。三好氏は「近頃年少の讀書子は、漢詩など

に親しもう」としな。『優れた古典がなるべく多くの機會になるべく多くの人々に讀まれることが、次の時代を迎えるために必須の條件となるだろう』その意味からも『唐詩のような望み得る限り十全な文藝作品は、いつの時代にもふりかえられ、いつの世にもくりかえし愛讀されていい』といわれ、また『國民の日常生活一般が漢字文化から乖離しようとしている』一般情勢の間にあつて、そうした漢字文化の貧困化を『他面から支えて防止し、或は緩和し、これに新しい轉機と新しい生命とを與えて、これを豊かな積極的な順應的な方向進路にふりむけなければならない』ともいつておられる。(この點は共著者である吉川氏も同意見であらうと思われる)

即ち、漢字文化を舊態のまゝに維持しようというのでなく、唐詩を通じて若き世代に古典的教養を身につけさせ以て新時代の漢字文化を形成せんと意圖せられたもので、こゝにこそ若き世代に近づける必要性があつたのである。思うに唐詩のようなものも、もはや一部知識人の享有物ではなく、廣汎な大衆に理解せられ、大衆に基盤をおいてこそ新時代にその文學的生命をもちうるのであつて、漢字文化の在り方が歴史の批判の前に大きく轉回せざるを得なくなつたことを示すものではなからうか。事實一般の人々にもわかるように平明で面白く説明の仕方は唐詩大衆化の具体的なあらわれであらう。

ところで本書では杜甫・李白が中心になつてゐるが、特に私の眼は杜甫にそゞる。吉川氏は、盛唐の時代仕官できず流浪の旅をする杜甫は「誠實な人格」の持主であり、彼の「社會と政治に對する、はげしい關心」も「人類の不幸をいたみ、その將來をおもひにかる、憂世の心」も、また「家族に對するこまやかな愛情」もみなそのきびしい誠實さの故である。それが「杜甫の詩の情熱の源泉」

でもある。そうした情熱は彼の自由律の長詩において發揮され「杜甫の本領」をそこに見出し得る。従つて「この小さな書物においても、それらを全然略し去ることはできぬ。全然略し去つては、讀者に對して不親切であるばかりでなく、杜甫に對しても相すまぬ」として「新婚の別れ」と「茅の屋の秋風に破られし歎き」の二篇をあげられてゐる。この二篇の解説は少々主觀的と思われぬでもないが、まことに流暢で印象的である。こゝに私は現在の吉川氏の姿を見るような氣がする。というのは、前者は「新婚の別れ」、夫を前線に送り出すおさな妻の言葉として、述べられてゐるが、明らかに杜甫自身の「戰爭を非難した詩」であり、後者は「みずからの悲しみ、みずからの苦しみ、自分たゞ一人の悲しみ苦しみとしては歌わずに、おなじ悲しみ、おなじ苦しみをもつ人々の詩として」社會の不合理性をいさとおつた詩であるが、戰爭の危機にある日本の現實を素直に見、「社會と政治に對するはげしい關心」をもたれる吉川氏が、生々しい現實の中に誠實に生きようとされ、唐詩特に杜甫の詩を通して民族の危機を多くの人々に訴えようとされる息吹を感じるからである。杜甫はその誠實さの故に權力をのろい、社會の不合理をいさどおり、またしいたげられたものゝ友であらうとした。しかしこうした不合理性の解決も、しいたげられたものゝ解放も、時に皇帝を忠諫することによつて、また自ら政治家となり「おのれのエネルギーを人々に對する善意としてはたらきかけ」ることによつて實現しようとする。そこに杜甫の限界があり、當時の社會的矛盾の源泉が唐帝國の皇帝を頂點とする支配体制にあることには氣付かなかつたのである。八世紀の杜甫にはやむを得なかつたことであらうが、現在の日本民族の危機に對しては、やむをえないではすまされない。

危機の源泉がどこにあり、その克服のためにいかにすべきかは、まさに我々自身の課題である。この課題解決の爲にも杜甫という歴史の人間の生きた時代の矛盾を知る必要があるのだが、入門書としての「新唐詩選」には當時の歴史的背景はほとんどのべられていない。杜甫があればど仕官をのぞんだのになか／＼つけず、流浪しなければならなかつたのは何故か、これを安祿山の亂に歸してしまふことはできないだろう。またやつと朝官になつたにも拘らず、まもなくそれを放棄したのは何故か、それを單に「天成の不平家」の故にといつただけでは餘りに物足りない。或いは「家族に對するこまやかな愛情」といわれる時、當時の家族制度が當然考慮さるべきであろう。恐らく本書を読む「若き世代」は杜甫の就職難と彼等の直面するそれを、同一範疇のものとしては考えないであろう。それだけになおさら「若き世代」には八世紀の就職難の本質が要求せられ

るのである。詩人である杜甫の人間とその作品を考える場合にも、生々しい歴史の場において把握してこそ眞に生きた人間杜甫とその作品をとらえ得るのではないか。その點吉川氏においては、かなりに歴史的時間が無視され、現代化されすぎたように思うが、これを文學者の氏にいうのは酷だろうか。しかし、この危機の時期において輝ける文化遺産「唐詩」に大きな役割を果させるためには、もつと積極的に文學者と歴史家は廣く手をつなぐべきであろう。そうしてこそ唐詩は眞に大衆のものとなり、大衆の中にその文學的生命をもちつゞけるであろう。また杜甫が友たらんとした「しいたげられたもの」にも大きな勇氣を與えるだろう。このような意味において唐詩入門としての本書が兩氏によつて出されたことは喜ぶべきことである。本書は多くの人々に愛され讀まれるであろう。(横田 滋)

昭和二十七年文部省科學研究費

各個研究課題(東洋史)

- 漢代史——中國における古代國家の成立 板野 長八
 契丹・蒙古における部族制の研究 愛宕 松男
 明清律を中心とする中國歷代法律の社會史的研究 小竹 文夫
 秦漢隋唐の賤民制度の研究——中國古代社會問題に關聯して—— 濱口 重國
 太平天國後における中國社會經濟解體過程の研究 波多野善大

- 中國制度史語彙の編纂 宮崎 市定
 中國古歲時記の復元並びにその研究 守屋美都雄
 中國中世の軍閥とその社會經濟との關係 日野開三郎
 舊中國社會における隱逸の存在意義——專制社會における抵抗の一つの型—— 根本 誠
 中世滿洲民族社會の研究 三田村泰助
 契丹文字の解讀 村山 七郎
 イギリスの對伊工業政策と關聯してみたるインド民族資本の發達史 細井 昌治
 「共同体」の歴史的諸形態とその現代における役割 旗田 巍